

校歌異聞

金子 重男 (中51回)



51回会場が横浜棧橋から出る貸切りの中型遊船だった。平成13年の中秋かと思う。

朝から幾度も日照り雨があって、気をもむ。

午後5時、このところめずらしい20人もの参加者だ。変わりやすい天候が、いつの間にか霧をもたらしていた。

沖の船舶が霧笛をひびかせる。何と横浜幹事らの心憎い演出かと、霧笛の都度、私らは「霧の横浜」に巡り合った幸せで沸いた。

かれこれの二時間で下船。発着所の待合室に腰をおろしていると、最後の一人がかなり遅れて、ステッキをたよりに棧橋を歩んでくる姿が目に入った。

ヤッ！佐藤義雄氏だ。船内では気付かなかったが、難病を克服したのか。今も自動車販売会社を経営しているのか。彼の姿が見えなくなって10年にもなろう。

待合室を出て彼のもとへ急いだ。

「たしか校長さんをなさっていると申された方ですね」

まだ良好とはいえない体調を感じた。

「はい。覚えていてくださったか」

「あんどき。石川さんと碁を囲んでいなさるようすでしたが」

あんどき、とは。

昭和57年2月初旬、そうだ節分の日。初めて私が関東地区51回から誘いをうけ、会の存在を知って参加した湯河原ホテルでのことである。

「多分、食膳が差し向かいだったようすがお目に残ったんでしょうか。私は全く囲碁を知らんです」

もう20年前にもなろう往時、新人の私の立ち居を記憶してくれていたのだ。

ところで私が彼を意識したのは、その湯河原の翌朝、散会のときのことであった。

「それでは皆さん、よろしいか」

彼が悠然と立ちあがって全員を見渡した。校歌斉唱の指揮であった。私の此のときの感じでは、51回創立のころから指揮は彼に固定しているのだなとわかった。おもむろに唇にしめりをくれると開口一番、

「儂は、昭和18年11月20日、90名に及ぶ高中の出陣学徒大壮行式、その日の新潟日報記事の一部を今も暗記しています」

校歌指揮に先立ち、彼にとっては欠くことのできない「次第」のようであった。私は耳を澄ませた。

「学窓に残る者、又遠からず出陣学徒に続けと戸田校長の両眼はうるんでいる。生徒の目にも一瞬キラリと決意の涙は光った。在校生徒代表の伊沢省二君は我等も続き出陣せんと壮行の辞を送れば、征で行く者、送る者の魂はただ熱く結ばれる」

伊崎幹事長が野口副幹事長に耳打ちをすると、コップに酒を満たして彼に渡した。一息いれると一段と覇気が面上にみなぎった。

「次いで出陣学徒代表の5年生川瀬一雄君は、山本元帥に続くは誰ぞ、アツツの勇士に続くは誰ぞ、諸君も後に続け、我等先ず散華せんと烈々の決意。歌う校歌は米英を撃つ雄叫びである。皇国の若き命の躍動は春日山頭にいつまでもこだましていた」

淀みない。私は固唾を呑んだ。昭和18年春に進学上京したので、この壮行式は知らなかった。

次いで彼の指揮、音頭は従容閑雅、ときには感奮荘重であった。参会者の多くは慣れてきたようだが、初回の私には胸の隅々に残る少年の日が鮮明に立ち上がってきた。

湯河原以降も格調高い彼の指揮に接したが、ここ10年間は合唱のたびに彼の病状を案じた。

「さびしかったですよ」

心底そう思った。すると彼は表情をやわらげながらも、キパッと言った。

「あることから、僕は自発的に校歌指揮を買って出ることになったのです」

「ほう！あること」

昭和20年8月、川瀬氏が特殊潜航艇「蛟龍」の特攻隊員として出撃近い或る日。中学の級友で兵学校生徒の石川氏に会いたいと艇を江田島に着けたときのことだという。

広大な兵学校校舎のどこにいるのか、受付事務官すらも石川生徒を見つけることが出来ず、制限時間内の上陸、彼は焦ったそうだった。

「で、どうしたですか。佐藤さん」

先を促してしまった。胸が詰まる。

森閑とした長い中央廊下で途方にくれた彼の心奥を突如「高中校歌」が過つたらしい。此のまま今生の別れとなるのか。「妙高山は岬々として」彼は肺腑を絞って歌った。

「川瀬、生きてたんか。どうして此処に」「どこにいた。もう先がないんだ石川」

二人は固い握手のこぶしに涙を落とした。そして間もなく彼は心置きなく沖縄の海へ出撃していったという。

「ところで、その話は両者が語ったものですか」

「いえ。僕の心と耳にどこからか伝わってきたんですな。とにかく僕は受け止めたんですわ」

二人が待合室に入ると間もなく霧が上がって、おびただしい電飾の光が波間に溶けていた。

とにかく、あれも此れも遠いとお日のことになった。

石川敬医学博士、川瀬一雄凸版社重役、そして、あの横浜棧橋で此の話を伝えてくれた佐藤義雄氏も、平成14年、19年、20年にそれぞれ天寿を全うされた。

それにしても、少年兵の日、青春も明日も投げうって殉国に賭ける学友同志をキリッと結んだ「校歌」の深さ、重さ、気高さ。更に佐藤義雄氏の熱い心の係わりが、今、うれしい。